

『のろまのウィルソン』における混血の表象

山 田 健 太 郎

The Representation of Miscegenation in *Pudd'nhead Wilson*

Kentaro Yamada

『のろまのウィルソン』は、『ハックルベリー・フィンの冒険』と並んで、マーク・トウェインのアメリカ南部を舞台とした小説として、しばしば取り上げられる作品である。しかしながら、トウェインが『かの異形の双生児』冒頭で述べているように (*Pudd'nhead* 119-22), 本来の構想から、外科手術のような力業で『かの異形の双生児』と奇妙な双子の関係をなす2つの作品となった創作課程を反映して、作中人物の性格設定が不安定で、また物語の急展開などが多く、様々な解釈上の問題をかかえる作品でもある。現代の科学的犯罪捜査に通じる指紋による犯人の特定、『王子と乞食』同様の取り替えっ子、さらにはアメリカを旅するイタリアの双子の貴公子という奇抜な設定が、この作品の解釈をさらに難しいものとしている。

南北戦争以前のアメリカ南部社会を描く中で、当然ながら提示されている人種問題についても、そこに混血を絡めたことから、斬新な問題提議がなされている一方で、その意味合いがいつそう複雑なものとなっている。そしてそこには、今日のアメリカ社会へも通じる問題が横たわっているように思われる。そこで本稿では、『のろまのウィルソン』における混血の表象を中心に、この作品に描かれる人種問題について、当時のアメリカ社会の黒人観などと関連させながら考察することにする。

作品の舞台は、ミズーリー州のドーソンズ・ランディングという町で、時代設定は1830年から始まり、物語の展開は1853年までとなっている。南部の典型的な小さな町で、保守的な価値とフロンティア的な新しいもの好きの要素が合わさった社会である。町の名士として知られているのは、判事であるヨーク・レスター・ドリスコル、その友人ペンブローク・ハワードなどの、ヴァージニアの旧家、いわゆるF.F.V. (First Families of Virginia) の家筋で、この二人の紳士のうち、ハワードは長老派だが、ドリスコルは自由思想家である。この小さな町に、北部人の「のろまのウィルソン」ことデーヴィッド・ウィルソンがやってくるから物語は始まる。

ドリスコル判事の弟であるパーシー・ノーサンバランド・ドリスコルが所有する奴隷の中に、この小説の主要登場人物の一人であるロクサーナ (通称ロキシー) がいた。ドーソンズ・ランディングにウィルソンがやって来てまだ間がないある日、彼が借りた家に隣接するドリスコル家の屋敷から聞こえてきたロキシーともう一人の黒人の会話の後、彼女について語り手が詳細な描写をする。

From Roxy's manner of speech, a stranger would have expected her to be black, but she was not. Only one-sixteenth of her was black, and that sixteenth did not show. She was of majestic form and stature, her attitudes were imposing and statuesque, and her gestures and

movements distinguished by a noble and stately grace. Her complexion was very fair, with the rosy glow of vigorous health in the cheeks, her face was full of character and expression, her eyes were brown and liquid, and she had a heavy suit of fine soft hair which was also brown, but the fact was not apparent because her head was bound about with a checkered handkerchief and the hair was concealed under it. Her face was shapely, intelligent, and comely – even beautiful. She had an easy, independent carriage – when she was among her own caste – and a high and “sassy” way, withal; but of course she was meek and humble enough where white people were.

To all intents and purposes Roxy was as white as anybody, but the one-sixteenth of her which was black out-voted the other fifteen parts and made her a negro. She was a slave, and salable as such. Her child was thirty-one parts white, and he, too was a slave, and by a fiction of law and custom a negro. He had blue eyes and flaxen curls, like his white comrade, but even the father of the white child was able to tell the children apart – little as he had commerce – with them by their clothes: for the white baby wore ruffled soft muslin and coral necklace, while the other wore merely a coarse tow-linen shirt which barely reached to his knees, and no jewelry. (8-9)

ロキシーは16分の1だけ黒人の混血で、外見上は黒人ではない。皮膚の色がとても白くて、目が茶色なだけではなく、その立ち振る舞いは堂々としていて、高貴な優雅さをもつと描かれている。見た目では判断すれば白人である。その彼女が、町の名士の一人セシル・バーリー・エセックス大佐とのあいだに生んだ子供チェンバースは、32分の1だけ黒人の血が含まれ、青い目をして髪の毛も亜麻色である。いつもロキシーと一緒に乳母車にのせて世話をしているトム・ドリスコルと見分けがつかないくらい外見上白人だが、「法律と慣習の虚構により」彼らは黒人となる。

人種の問題について考える際に、ほとんど当然のこととして、「純粋な」人種というのは幻想ではあるのだが、この作品で「混血」として登場する二人は、どのように「黒人」と「白人」の中間的な存在として描かれているのであろうか。まずはロキシーから検討することにしよう。

先ほどの引用の直前では、ロキシーが近くの黒人と冗談交じりの世間話をしている。そして引用にあったように、話しぶりからすれば、ロキシーは黒人である。16分の1の黒人の血が16分の15を占める白人の血を否定し(投票で勝って)、アメリカ南部の町ドーソンズ・ランディングの社会で彼女は黒人として暮らしている。圧倒的に白人の多い混血なのだが、黒人と彼女を分ける境界線のようなものが特に描かれることはない。物語が進展するきっかけとなったドリスコル家の盗難騒ぎでは、ロキシーだけが盗みをしていなくて、その場で盗んだことを白状して謝った他の使用人の黒人と異なる運命をたどることになる。ロキシーだけが、黒人の中で特別な存在であるかのような構図をここに読めなくもないが、この盗みに同情的な説を展開する語り手は、“Was she worse than the general run of her race? No. They had an unfair show in the battle of life, and they held it no sin to take military advantage of the enemy...”(11)と、ロキシーを同じ黒人範疇に入れている。実際、物語を通じて、ロキシーの生活は黒人コミュニティの中で成立しており、時には気取った態度を取るようではあるが、あえて自分を黒人とは違う存在として主張することはない。むしろ、破産した後や、逃亡奴隷になった時のロキシーの行動に典型的なように、危機に陥ったときに逃げ込める安全な居場所として黒人社会をとらえている。語り手の立場からもロキシーの帰属という点からも、彼女は黒人であって、それ以外の存在ではない。

しかし、公に表明することはないにせよ、ロキシーにとって自分の中にある白人の血が彼女のアイデンティティーにとって重要な位置を占めることがわかる場面がある。ミシシッピー川の定

期航路船で客室係りの仕事をして、かなりの蓄えをしながら、銀行の破綻で財産を失い、傷心のうちにドーソンズ・ランディングに戻ってきたロキシーは、自分の策略でドリスコル家の息子として育ったチェンバーズ（以後偽トム）に、肉親に対する優しさをほのかに期待して近づくが、偽トムのあまりに冷酷な扱いに復讐心を煽られ、彼が黒人であり、また自分の実の子であることを告げる。そして父親のことを尋ねられて、誇らしげに偽トムの血筋について語りだす：

“ Ma, would you mind telling me who was my father? ”

He had supposed he was asking an embarrassing question. He was mistaken. Roxy drew herself up, with a proud toss of her head, and said:

“ Does I mine tellin’ you? No, dat I don’t! You ain’t got no casion to be shame ’ o ’ yo ’ father, I kin tell you. He was de highest quality in dis whole town – Ole Virginny stock, Fust Famblies, he was. Jes ’ as good stock as de Driscolls en de Howards, de bes ’ day dey ever seed. ” She put on a still prouder air, if possible, and added impressively, “ Does you member Cunnel Cecil Burleigh Essex dat died de same year yo ’ young Marse Tom Driscoll’s pappy died, en all de Masons en Odd Fellers en churches turned out en give him de bigges ’ funeral dis town ever seed? Dat’s de man. ”

Under the inspiration of her soaring complacency the departed grace of her earlier days returned to her, and her bearing took to itself a dignity and state that might have passed for queenly if her surroundings had been a little more in keeping with it.

“ Dey ain’t another nigger in dis town dat’s as high-bawn as you is. Now, den, go long! En jes ’ you hold yo ’ head up as high as you want to – you has de right, end dat I kin swah. ”

(43)

ロキシーは誇らしげに、偽トムの父親は、F.F.V.に連なる名門の血筋である町の名士の一人セル・バーリー・エセックス大佐だと告げる。そしてこの町の黒人の中で、偽トムは他にけっして引けを取らない高貴な素性のものであるという。名家ドリスコルの息子として育った偽トムが、黒人へと身分が転落したと思ったら、今度は黒人の中で誇り高き血筋と持ち上げられる、皮肉で滑稽なエピソードであるが、ここに混血ロキシーのアイデンティティーの複雑さを垣間見ることができる。

ロキシーの中にある名家の血筋への誇りは、偽トムがイタリアの双子との裁判沙汰の後に会った場面でも表面化する。ドーソンズ・ランディングに滞在することになったイタリアからの双子を町が一体となって歓迎する催し物が行われた後、バクストンに誘われて二人は「飲酒党」(rum party)の会合に出かけるのだが、それに同行した偽トムが、二人を公衆の面前で茶化したことから、壇上から蹴り落とされるという不名誉な扱いを受ける。これに憤った偽トムは、双子のうちで実際に蹴ったルイージを裁判に訴えて、わずか5ドルの罰金であるが、勝訴したことで満足する。そのことを知ったドリスコル判事は、名誉を傷つけられた時に由緒正しい紳士として取るべき選択は決闘しかないにもかかわらず、それをせずに、名誉をたった5ドルの罰金で挽回しようとした甥に激怒し、財産が彼に行くように取り決めた遺書を破り捨てる。偽トムは、自分が正しいと考えて取った行動が真っ向から否定され、さらに財産相続権も失ったことによる傷心から、実の母親であるロキシーからの慰めの言葉を期待して、いつもの密会場所であるあばら家に彼女を訪れるが、ロキシーが口にするのは、「おまえを蹴ったやつとの決闘をしなかったのかね」(you refuse’ to fight a man that kicked you)という詰問であり、決闘を逃げた偽トムの弱さに対する「おまえの中の黒んぼがそうさせたのさ」(It’s de nigger in you, dat’s what it is)という言葉であった(70)。ここにおいてロキシーは、ドリスコル判事と同じF.F.V.という名家の

価値観を共有している。そして、自分の中にある黒人の血を忘れたかのように、あるいは否定するかコントロールできる要素であるかのように、偽トムの弱さを黒人的な特徴として名指している。しかしながら、この誇りは、先の引用の後半にあったように、黒人同士の比較の中でのみ主張することが可能なものであり、しかもかなり慎重にしか語られない。ロキシーがその血筋について白人に語ることはこの作品ではない。そもそもロキシーは名家どころか白人ですらない。それはこの作品世界、さらには作品発表当時のアメリカ社会における混血の存在認識ともかかわる問題といえよう。それはある意味では今日にまで至るといえるかもしれない。考えてみれば、偽トムの借金を解決するために、みずからが奴隷として売られることを偽トムに提案する時に、ロキシーが自分の黒人性を証明するとして彼女の黒人言葉が、彼女がF.F.V. からかけ離れた存在であることを、作品全体を通して絶えず指し示しているのである。

ロキシーは、そのおかれた複雑な状況にもかかわらず、生まれた時から自分のアイデンティティを組み立ててきたと思われる。その課程の中で、南北戦争以前の南部社会における自分の身のおき方を自然に習得してきたようである。それに比べて、白人のしかも名門のドリスコル家の甥として育ちながら、ある日突然と自分が幼少の時に入れ替えられた黒人であることを知った偽トムの受けた衝撃はとて大きい。暗い真実を知らされた翌日から、犯罪者のような苦悩の日々を偽トムは過ごすことになる：

For days he wandered in lonely places thinking, thinking, thinking - trying to get his bearings. It was new work. If he met a friend he found that the habit of a lifetime had in some mysterious way vanished - his arm hung limp instead of involuntarily extending the hand for a shake. It was the "nigger" in him asserting its humility, and he blushed and was abashed. And the "nigger" in him was surprised when the white friend put out his hand for a shake with him. He found the "nigger" in him voluntarily giving the road, on the sidewalk, to the white rowdy and loafer. When Rowena, the dearest thing his heart knew, the idol of his secret worship, invited him in, the "nigger" in him made an embarrassed excuse and was afraid to enter and sit with the dread white folks on equal terms... He said to himself that the curse of Ham was upon him. (44-45)

にわかに意識することになった自分の中の黒人が、偽トムを、名家の甥で東部の大学から戻ってきて意気揚々と人前で振舞う人物から、人目を避けてこそそこそと通りを歩く者へと豹変させる。白人であれば、浮浪者にまで思わず道を譲ってしまう始末である。わずか32分の1しかない黒人の血の存在が、偽トムに「ハムの呪い」と呼ばせる苦しみを与えることになる。

しかしながら、この状態は長続きしない。偽トムの長い年月をかけて形成された白人としての人格と習慣が、しだいに彼の行動の支配を取り戻す。ちょうど重罪を犯した人間が、罪の意識を抱えながらもまったく普通に日常生活を送るように、以後偽トムは自分の黒人性をひた隠しにして生きることになる。黒人であることを話題にするのは、ロキシーと会っている時だけである。ある意味でpassingということになるのだが、体に染み付いている習慣がもともと白人であるだけに、最初から黒人として生まれながら、それを隠して生きていこうとする人物のような苦悩の様子はほとんど見られない。

この作品において、南部社会に「虚構」として作られた人種の壁をめぐる悲劇に巻き込まれた人物として、もう一人トムがいる。彼は混血ではなくて、ロキシーによって混血である偽トムと入れ替えられ、ロキシーの息子として育てられた。つまり白人が黒人として育てられるとどういふことになるかという例として描かれている。その状況のアイロニーをもっとも象徴的に表現しているのが、ロキシーがドーソンズ・ランディングに戻って、偽チェンバースことトムに再会す

る場面である。偽チェンバースから偽トムの様子を聞きだそうとして、偽トムへの遺言状を怒ったドリスコル判事が破り捨てたことを聞いたロキシーは、ショックのあまり偽チェンバースに向かって“Take it back, you misable imitation nigger”と罵る。それに対して偽チェンバースは“Bofe of us is imitation white”と言い返す(35)。同じ混血が、ロキシーの立場からは黒人のなりそこない、偽チェンバースの立場からは白人のなりそこないとなっている。ロキシーにとって、混血はたとえ白人の血が多くても根本的に黒人と考えているようである。一方偽チェンバースにとっては、より白人の血が多いからか、というよりは皮肉にも自分では気がついてないその白人性ゆえにか、混血としての彼らは、黒人ではなくてどちらかという白人だと発言する。自分たちはとても黒人のなりそこないにはなれない(“we don't mount to noth'n as imitation niggers”)という彼の言葉は(35)、実際には彼は白人であるがゆえにきわめて皮肉に響く。トウエイン流のアイロニーをここに読み取ることができよう。いずれにせよ、しかし、この作品の中では、混血は白人／黒人という二項対立に引き裂かれた存在となっており、中間的な独自のアイデンティティーを与えられていない。

黒人作家Langston Hughesは、1964年版の『のろまのウィルソン』に書いた序文で、この作品を、黒人文学の重要な先駆けの一つと賞賛し、まだ黒人を無知で脳天気な奴隷や無知で惨めな自由黒人として描きがちであった時代に、滑稽でも野蛮でもない人物像を表象している点を高く評価している(328)。そのステレオタイプの黒人像から脱却するためにトウエインが考案したのが、混血という設定であった。人間を白人と黒人という2つのカテゴリーに分ける人種概念の「虚構」性を際立たせる中間的な存在である。しかしながら、その中間的な混血としてどのように独特な表象が達成されているか、現実の混血の生き様をくみ取った表現となっているかについては、これまで見てきたように、おおいに疑問があるといわざるをえない。むしろ「虚構」とされた白人／黒人の二項対立は、作品の舞台となった南北戦争以前の南部社会を支配する法として描かれ、その下で中間的な混血だけでなく、間違いで別のカテゴリーに仕分けられた名門の白人トムの人生までが翻弄される。

人種概念の支配力は南北戦争以前だけにとどまるものでもなく、また南部社会だけのものでもなかった。Eric J. Sundquistは、『のろまのウィルソン』における最重要テーマが人種であるとし、とりわけこの作品には南部再建期以後のアメリカ社会で浸透しつつあった黒人抑圧強化への動きに対する批判があると述べている。そして1896年の「分離すれど平等」で有名なブレッシー対ファーガソン裁判にいたる南部再建期以後のアメリカ社会が、北部と南部連帯で黒人に与えられた権利と奪い返そうとしていたこと。その背後には強固な人種概念があったことを論じている。George M. Fredericksonが示したように、そもそも南北戦争以前から、人種概念に基づいた黒人差別は、北部南部の区別なくアメリカ社会に広く浸透していた。科学者は偏見を否定するどころか、白人と黒人は種としての起源が異なるという説が1840年代から1850年代にかけて主張されるなど、むしろ黒人を劣等で白人と相容れない存在とする考えを補強することもあった(71-96)。ダーウィンの進化論も、その自然淘汰の考えは、白人と黒人は種が違うという前提と結びつき、アフリカ大陸から連れてこられた黒人が、その肉体的特徴から、南部の一部の気候を除いて生存に適した環境となっていないので、アメリカ社会においてやがて減少していくであろうという推測を生み、1890年の人口統計が公表された際には、そこに見られる黒人人口の減少を、黒人がアメリカから消滅する予兆と主張する論文も発表された(228-55)。一方、混血が意味する人種の壁の崩壊の可能性に対する、嫌悪感あるいは警戒感からか、黒人と白人の混血は、生物的に劣る種とする研究も発表された(80, 234-35, 246-47)。このように、『のろまのウィルソン』が出版された当時のアメリカ社会では、黒人と白人を区切る人種概念が深く浸透していた。トウエインは、

そのたくましい反骨精神から、これを風刺する作品として『のろまのウィルソン』を世に送り出したわけである。

人種差別に批判的なトウェインが書いたこの作品は、理想を求めた夢のようなユートピア小説ではない。舞台は時代を南北以前にまで遡った南部で、『ハックルベリー・フィンの冒険』には及ばないが、作品世界には、町に建つ教会の様子など(31)、彼が幼少時代を過ごしたハンニバルの様子を思わせるリアリティが感じられる。むしろ南北以前の南部社会に厳然と存在し、出版当時にもまだアメリカ社会に根強く残っていた人種偏見構造を強烈に描くことで、問題を浮き彫りにする企みであったといえよう。Shelley Fisher Fishkinも、風刺とアイロニーを通して表現するトウェインの作風を考慮に入れることがこの作品の理解に重要であるとしている(135)。

その力技的風刺の物語の設定として登場したと思われる混血の作中人物は、実際に数多く存在した混血の人々の表象というよりも、様々な要素が組み合わされた現実離れしたものとなっている。特にロキシーは、複雑さの際立つ表象となっている。Carolyn Porterも述べているように、多くの批評家たちがロキシーを傑出して強い人物像と認めている一方で、彼女の言動は極めて複雑な側面を持ち、時にはそこに読み取れる白人至上主義や暴力性を批判されることもあった(121)。

ロキシー像に関する議論の興味深い例として、Werner Sollorsによるロキシーの肖像についての考察をあげることができる。Sollorsは、ヴァージニア大学のホームページ上に公開されているトウェインの出版物の挿絵のコレクションの中から、ロキシーの挿絵とそれに関するStephen Railtonの記述を紹介する。そこで問題となっているのは、*Century*誌に最初に『のろまのウィルソン』が掲載された際の挿絵画家Louis Loebによるロキシー像とAmerican Publishing Company社から出版されたこの作品にEdward Windsor Kembleが描いた挿絵のロキシー像との大きな違いである。Louis Loebがロキシーを髪の毛も豊かに広げた白人女性として描いた一方で、Kembleは、周囲の黒人と見分けがつかないほどのステレオタイプの黒人として描いているのである。Sollorsは、ロキシーがこの挿絵の中で問題とされている典型的な黒人ではなく、片隅に描かれている黒人と白人の中間的特徴を持つ人物だと考えることで、このロキシー像に指摘されたKembleの人種偏見に対する批判を打ち消している(“Was Roxy Black?”)。もちろん、Sollorsの説に従えば、ロキシー像をめぐる問題は解決したように思われるが、そもそもRailton以外にも批評家がKembleのステレオタイプの黒人像がロキシーと考えたのはなぜであろうか。それは作品テキストに描かれるロキシーにそう思わせる要素があったのではないだろうか。

たしかにロキシーは、作品冒頭で登場するときに、すでに引用したように外見上は優雅な白人女性として描かれる。しかしながら、その容貌に関する描写はその後あまり繰り返されない。一方、上で述べたことの繰り返しになるが、ロキシーは黒人コミュニティの中でまったく違和感なく暮らしている。そして話す言葉は典型的な黒人言葉である。読者の体験からすれば、ロキシーの黒人的側面に作品の大半を通じて触れることになる。しかもロキシーの話す言葉は、黒人ステレオタイプの一部を形成するものである。そう考えれば、Kembleの挿絵に特に疑問をもたなかった読者が多かったことや、Kembleの人種偏見を論じた批評家が、その絵の片隅にあるロキシーを探すのではなく、おおいにありうることとして、典型的な黒人表象をKembleがロキシーに与えたものと考えたことも納得できよう。ロキシーには、その表象として、容貌として描かれる白い貴婦人的要望と、作品中の自己表現の度に使う典型的な黒人言葉が二重に与えられており、彼女の人物像はそのあいだで揺れ動いているのである。

Werner Sollorsは、混血文学の歴史を概観した著書の中で、18世紀から20世紀のアメリカ社会における混血をめぐるカテゴリーの特殊性について述べている。彼によれば、ラテン・アメリカ

では混血についての様々な名称があり、混血は細かく分けられた混血としてのアイデンティティを容易に持つことができる。一方、アメリカ社会では、あらゆるレベルの混血は基本的に白人か黒人という2つのカテゴリーに分けられる（*Neither Black Nor White* 112-141）。つまりアメリカ社会では、白人と黒人の混血は強制的に2つのどちらかに、しかもほとんどの場合は黒人にされてきたのである。もちろん多文化主義以降のアメリカでは、いわゆる雑種化も進み、様々な度合いの混血に社会的な存在を認めるようになってきてはいる。しかしながら、バラク・オバマ大統領も、当選直後は、ABCニュースの“The Color of Change”などに見られるように、その混血性についてのメディアによる報道が一時期盛んであったにもかかわらず（Heussner）、結局は「黒人」大統領として報道されるのが常となったように、その二項対立のカテゴリーは今日のアメリカ社会でも機能している。ロキシーの抱える問題は、その性質は異なるにせよ、今日にまで続いているのである。

引用資料

- Fishkin, Shelley Fisher. “Mark Twain and Race.” *A Historical Guide to Mark Twain*. Ed. Shelley Fisher Fishkin. Oxford University Press, 2002. 127-62.
- Fredrickson, George M. *The Black Image in the White Mind: The Debate on Afro-American Character and Destiny, 1817-1914*. Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1971.
- Heussner, Ki Mae. “The Color of Change: Obama’s Victory Is a Sign of Racial Progress on Multiple Levels.” *ABC News*. Nov 14, 2009.
<<http://abcnews.go.com/US/story?id=6249150&page=1&page=1>>
- Hughes, Langston. “Mark Twain’s *Pudd’nhead Wilson*.” 1964. *Interracialism: Black-White Intermarriage in American History, Literature, and Law*. Ed. Werner Sollors. Oxford University Press, 2000. 326-30.
- Porter, Carolyn. “Roxana’s Plot.” *Mark Twain’s Pudd’nhead Wilson: Race, Conflict, and Culture*. Ed. Susan Gillman and Forrest G. Robinson. Durham and London: Duke University Press, 1990. 121-36.
- Sollors, Werner. *Neither Black Nor White Yet Both: Thematic Explorations of Interracial Literature*. Cambridge, Massachusetts, London, England: Harvard University Press, 1997.
- . “Was Roxy Black?: Race as Stereotype in Mark Twain, Edward Windsor Kemble, and Paule Laurence Dumber.” in Jonathan Brennan Ed. *Mixed Race Literature*. Stanford, California: Stanford University Press, 2002. 70-87.
- Sundquist, Eric J. “Mark Twain and Homer Plessy.” *Mark Twain’s Pudd’nhead Wilson: Race, Conflict, and Culture*. Ed. Susan Gillman and Forrest G. Robinson. Durham and London: Duke University Press, 1990. 46-72.
- Twain, Mark. *Pudd’nhead Wilson: A Tale*. 1894. Reprint. *Pudd’nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*. Ed. Sidney E. Berger. New York, London: Norton, 1980.